

講座Ⅲ「卒業生に学ぶ 難聴」

原口 凌輔さん

今回はこのような講演の機会を頂き、本当にありがとうございます。難聴障害者として当事者の経験を踏まえた上で、難聴学級で指導している皆様にお話をさせて頂きたいと思います。

僕は現在27歳で、練馬区立豊玉南小学校、練馬区立開進第二中学校、都立三鷹高校（今は中高一貫校）、産業能率大学を卒業しました。ろう学校は幼稚部以外の経験はなく、難聴学級は小学校の「聞こえの教室」と中学校の「難聴学級」を経験しました。現在は社会人4年目なのですが、障害者アスリート社員として会社に勤めながら、「デフサッカー」という聴覚障害者のサッカーの日本代表として活動していき、その活動を応援していただいています。これまで難聴学級で講演をさせていただく機会が何件かありまして、その際に子供たちにお話していることを、今回、簡潔にお話させていただきたいと思います。

まず、僕の難聴障害と聴力について、お話します。

いつも子供たちに、「皆さん、新しいお友達や仲間、先生など初対面の方々に、自分の障害と聴力について説明することができますか？」と聞きます。半分は「できまーす！」もう半分は「ちょっとできないなあ」という風に回答をいただくんですが、なぜこう聞くかというと「聴覚障害」と一言で表しても、人それぞれの様々な聞こえ方があるからです。これは目も耳も同じで、軽度や重度、どのような種類の聞こえ方があるのかということをお子たちに問いかけています。また聴力を表した表を見せながら、僕がどのくらいの聴力なのかをクイズで聞いています。そして僕は重度の聴覚障害で両耳とも100dBなので、補聴器を外した状態だと、自動車のクラクションや電車のガード下の音がやっと聞こえるレベルの聴力ですよ、ということを伝えています。

難聴の人がよく言う「補聴器を着けて普段の日常生活を送っています」ということについても、本当に補聴器を着けていると普段の日常生活が送れるようになるのか、子供たちに話します。聴覚障害者の聞こえ方は、大まかにいうと「伝音性難聴」と「感音性難聴」の2つがあります。伝音性難聴の方が補聴器を外した状態で聞くと、小さく、薄く聞こえます。感音性難聴の方は、めちゃくちゃに聞こえてしまいます。補聴器を着けた状態だと、かなりめちゃくちゃに聞こえてしまいます。そこで、子供たちに「自分の聞こえ方はどれかな？」という問いかけをします。こういう風に、聴力と聞こえ方の種類について自分がどれにあてはまるのかを考えてもらって、どのように聞こえて、どこまで理解できるのかを自分で理解して、きちんと言語化できるようになってからが、人間関係を築く時のスタートラインに立てると思っています。

次に、「実は、私たちは聴覚障害者であると同時に、情報に関する障害者でもあるんだよ」ということをお話します。これがどういうことか、自分の学生生活を踏まえた上でお話するのですが、某テレビ番組のネタを拝借して、「しくじり先生、俺みたいになるな」と称してお話します。

まずは勉強面のお話です。僕は高校で、何度も「青点」という伝説の点数を取りました。「赤点」は「平均点の半分以下」を表す点数ですが、「青点」とは「赤点のさらに半分以下」を表す点数です。このひどい点数を、僕は何度も取ってしまいました。そして、1年間「浪人」という勿体ない期間を過ごすことになりました。小学校から中学校までは、難聴学級のおかげで様々なサポートを受けられたので、勉強をしっかりと理解することができ、また自習することもできました。しかし高校に上がると、これまで難聴学級があったからこそ受けることができたサポートや配慮を受けられなくなってしまいます。そうなると、学校側から、先生側からの理解や配慮も特にないまま授業を受けてしまうことになります。そして、今までより格段に勉強が難しくなってしまいます。なので、僕は「青点」を取ってしまい、「浪人」をしてしまうことになりました。では「どうすればよかったのかな？」と子供たちに問いかけます。そして僕は、「自分の障害をはっきり理解して、情報保証を得られるようにするべきだった」とお話します。

次に、コミュニケーション面のお話です。25%…これは集団の中で一般人聴者が得られる情報のうち、僕が把握できる情報の割合です。例えばディスカッションのシーンで、誰かが何かを言った時、周りの人は「ああ、この子はこういうことを言っているんだな」と大体100%分かります。しかし中学生の時の僕は、元気よく手を挙げているんですけど、25%しか分かっていないまま手を挙げていました。

20年…これは「(上記のように25%しか把握できてないのに)自分は100%を把握できている」と思い込んでいて、「このままでいいや」と勘違いしていた年数です。どれほどの情報を、どれほど無駄にして、勿体ないことをしていたのかが分かります。

僕は「圧倒的な情報不足により、数えきれないほどのチャンスを無駄にしてしまったしくじり先生」です。あの頃は、「みんなの話の流れを止めたくないなあ」「今ここで分からなかったことを聞き返して、嫌な顔をされるのが嫌だなあ」「相手に負担をかけてしまうから、分からなくても黙っておこう」と思ってしまったんです。そうすると、本当は分かっていないのに分かったふりをしてしまうことがめっちゃ多くなってしまい、次第に、話が通じない場面が起きました。それが何度も何度も話起こってしまい、仲間はずれにされたり、同じ場で会話しているのに自分だけ輪に入れてもらえないことが多くなりました。集団行動で場面に相応しい行動ができなくて怒られたこともありました。それが、高校時代の最大の後悔に繋がってしまいます。

僕の高校のサッカー部は、全国レベルの強豪校の部活でした。部員が150人いて、顧問やコーチ、キャプテンの話が輪になって聞くことが多いんですが、僕が遠くから話を聞いても全て分かるわけがないんです。なので、チームの戦術も分からず、監督、コーチの言っていることも分からないので、どうプレーしていいのかも分からないままでした。これが3年間積み重なると、当然レギュラーはおろかトップチームには入れませんでした。精神的な面でも実力の面でも、監督やコーチ、キャプテンの話をしっかり聞いて積み重ねることができたみんなと、何も分からずに「このままでいいや」と思っていた自分とで

は、本当に圧倒的な差が付いてしまいました。自分から「自分は耳が聞こえません。なので、こういった風に教えてもらえれば嬉しいです」という風にアクションを起こしていれば、何かが変わっていたかもしれません。でも自分は、どうすればいいかも分からないままだったんです。これが僕の最大の後悔です。

「もし、このような場面に遭遇した時、みなさんだったらどうしますか？」と、子供たちに問いかけます。そして、僕は後悔しているので、「聞こえる聞こえないに関わらず、情報は自分からアクション、動かないと何も得られません」「何もしないことそのものが既に失敗に繋がってしまう」と伝えています。自分で調べる、分からないことを自分から聞く、という当たり前のことが、意外となかなかできないので、こういったことができる子になってほしいという思いを伝えています。

聴覚障害は情報障害を生む…①自分は、どのような聴覚障害であり、どのくらい重いのか。②このような障害を持っていることによって、自分が苦手なこと、できないことは何なのか。③その時、周りにはどのように助けてもらってほしいのか。こういったことを、子供たちが今のうちから考えておくことは、すごく大事なことだと思います。そして、これらを自分できちんと理解をして、上手に伝える力が必要だと思います。

ここまでが、子供たちに講演している内容です。ここからは難聴学級で指導している皆さんに、僕から難聴学級の経験を踏まえた上で伝えたいことを、話したいと思います。

僕には、難聴学級で印象に残っているエピソードが2つあります。

1つ目は「1時間机に突っ伏して泣いた事件」です。僕は中学1年生の時に、数学、国語、英語を難聴学級で受けていました。数学の前が体育だったんですが、ある時、体育の後の着替えの時にすごく嫌なことがあって、すごく悔しくて、泣きたいくらい辛くなりました。でも中学生で男ということもあり、ちょっと意地を張って、絶対に表では泣かないと決めていました。その時もグッと、グワーツと我慢して難聴学級に向かったのですが、数学の授業が始まるという時に、我慢できなくてブワーツと泣いてしまったんです。この時、他に難聴の生徒がいなく、先生と1対1の授業だったので、「自分がこのまま泣いていたら授業も進まないのヤバイ」と思って、先生に「すみません」と謝りました。でも先生は笑って、「大丈夫」と言ってくれました。その言葉に甘えてそのまま泣いてしまって、結局、授業が終わるまで1時間ずっと泣いていました。「ヤバイ！」授業も全く進まなかったし、本当に申し訳ないことをした…感情が落ち着いて先生に「すみません」と謝ると、先生は笑って「スッキリした？」と言ってくれました。自分も単純だったので「はい、スッキリしました！」と言って、そのまま元気よく帰っていきました。この出来事がきっかけで「あ、自分がここにいていいんだ」「この難聴学級では、素直な自分を出してもいいんだ」と気付くことができました。

中学生の世界は「家庭」か「学校」かのどちらかしかないと思うんですが、僕には、学校の中にもう1つ「自分を素直に出せる居場所」ができたので、「あ、難聴学級にも居場所はあるんだ。ここにいてもいいんだ」と気付きました。そして心理的に楽になり、精神的に余裕をもって、3年間の学生生活を過ごせ

るようになりました。「生徒が素直な自分を出せる居場所」の1つに、難聴学級がなれるといいなと思うので、みなさんにも、そういった居場所ができるような手助けをしてほしいと思います。

2つ目のエピソードは、「今でも記憶に残っている授業中の世間話」です。みなさんにとって「授業中の世間話」は、くだらない、些細な内容が多いと思うんですが、聴覚障害を持った自分にとっては、「普通の授業の中の世間話」は全く分かりませんでした。みんなが「へえ！」と反応したり、ちょっと笑っている反応をしても、自分だけ何も分かりませんでした。隣の子に「今、何話していたの？」と聞こうとしても、やっぱり授業中なのであまり聞けません。なので、自分にとっては本当に縁のない話でした。

でも、これが難聴学級での先生の世間話となると、聴覚障害のある自分でも、少人数の中でのコミュニケーションになるので大体話が分かるんです。すごく内容が入ってくるし、当時中学生で何も世界を知らない、世の中を知らない自分にとっては、すごく面白い、興味を惹かれる話でもありました。これが、授業への興味や集中に繋がりました。世間話の内容は、「バイクの事故を起こしたが、柔道を習っていたおかげで、咄嗟に受け身をとって大きなケガには繋がらなかった」など、くだらないものだったのですが、それが大人になってから繋がってきました。自分は今、サッカーをやっていますが、危ない倒れ方をした時に咄嗟に受け身を取った時に、「あ、そういえばあの先生もそんなこと言っていたな」と思い出します。

このように、大きくなってから繋がるものもあると思いますし、何かを始める、何かに興味を持ついいきっかけにも繋がると思います。先生にとっては授業を進めることが1番大事でも、聴覚障害を持った自分たちにとっては「人生の先輩」でもありますので、そういった先生の世間話が、外の世界だったり世の中を知る大きなチャンスの1つだと思います。だから時間の許す限り、今までで面白かったことやネタになったことなどを、たくさん生徒たちにはお話してあげてほしいです。それが結果的に授業に集中することに繋がったり、生徒の色々な興味が広がるいいきっかけになったりすると思います。

最後に、僕からみなさんに伝えたいことは、「生徒のよき仲間になってほしい」ということです。学生時代、僕は本当に難聴学級の存在に助けられました。現在は、情報保証の環境が変わり、人工内耳をつけた生徒も多くなったので、聞こえの良くなった子も増えたと思います。通常学級も、難聴の生徒にとっては過ごしやすい環境になってきたと思うんですが、必ず、どこかで大きな壁にぶつかる時って絶対に来ると思います。その時に先生たちには、そばにいて、一緒に壁を乗り越える手助けができるような存在であってほしいなと思います。

今、僕はデフサッカーをやっています。デフサッカーの競技人口は少ないため、「競技周知」という形で、講演だけでなく、デフサッカー教室なども、難聴学級に行ってやらせていただいています。みなさんの学校にも、もしよかったらお誘いいただければと思います。

ここまで聞いてくださり、本当にありがとうございました。